

SESSION 2013

AGRÉGATION
CONCOURS EXTERNE

Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : *La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.*

Tournez la page S.V.P.

1) Traduire en français le texte joint.

吉見俊哉 「大学とは何か」 2011年。

2) Etudier dans ce texte les différents usages des démonstratifs この、その、あの、
これ、それ、あれ、ここ、そこ、あそこ .

メディアとしての大学

本書における探究の軸となっている第二の視点は、コミュニケーション・メディアとしての大学、すなわち図書館や博物館、劇場などの文化施設はもちろんのこと、活版印刷からインターネットに至る諸々のメディアの集積のなかで、同じようにメディアの一種として大学という場を考えることである。大学は、知識の生産・再生産過程の重要な部分を担ってきたが、あくまでその部分にすぎないのであり、同時代の知のコミュニケーション秩序の重層的な編成のなかに占める位置により定義し直されるべきである。大学は教育研究の「制度」以前に、「教える」ないし「学ぶ」というコミュニケーション行為の場である。そして、そうした実践が具体的な場所(教室、キャンパス)や技術的媒体(書物や黒板、パソコン)と結びついて営まれているという意味で、それはまずメディアなのだとも考えられる。

メディアとしての大学が、学知が営まれるより広いメディアの積層のなかで最初に困難に直面したのは一六世紀であった。その前世紀半ば、グーテンベルクによって印刷術が発明されたことで、口承や手書きの文化が活字の文化に移行する人類の知識史上決定的な革命が起きた。この印刷革命は、宗教改革や近代科学誕生の前提となり、やがて出版文化を基盤に近代知の偉大な「著者たち」が登場してくる。こうした知の地殻変動のなかで、大学は何ら積極的な役割を果たしていない。それどころか、かつて中世の知識人たちが、教会神のメディアと大学(理性のメディア)という二つの「メディア」を用い、「神の言葉」や「理性の言葉」の媒介者となっていたのに対し、出版という新しいメディア機構は、教会とも大学ともまったく異なる媒介の地平に、膨大な読者を巻き込む新たな知の担い手(著者)を出現させるのである。

やがて一七―一八世紀、出版産業が勃興し、書店や読書の文化が広がって、知識の生産や流通の方式が決定的に変化した後も、大学は伝統的な体制を変革しようとはしなかった。それどころか宗教改革期の宗派対立を超える対話的空間を創出することもなく、人文主義や科学革命への対応も遅れ、ラテン語中心の教育へのこだわりと国民語への蔑視も後の時代まで引きずったため、大学は知識生産の前線ではすっかりなくなっていたのだ。この時代の大学に欠けていたのは、出版流通を基盤とする新しいメディア状況、そこにおける新たな知識創成への敏感な対応である。この敏感さを備えていたのは大学人ではなく、むしろルネサンスの人文主義者から啓蒙期のエンサイクロペディストまでの、民間の知識人や芸術家たちであった。

ここに示されるのは、大学はそもそも単独で、新しい知識の形成や流通、継承を可能にする最も基盤的なレベルたり得ないという事実である。大学よりもっと基盤の層には、多種多様なメディアによるコミュニケーション交通の積層があり、大学とは、そのようにして積層する知識形成の実践を集中化させ、再編成し、より安定的に継承可能なものとしていくメタ・メディアである。この認識を欠いたため、近世の大学は印刷革命によって生じた新たな状況に対応できず、新しい知を媒介するメタレベルの組織へ発展することに失敗したのである。

そして今日、デジタル化とインターネットの普及のなかで私たちが直面しているのは、印刷術が知の根底を変え始めた一六世紀にも似た状況である。一六世紀に出版は、教師や学生が都市から都市へと新しい知を求めて旅した時代とは比べものにならない大量の知識の流通を可能にし、人々が居ながらにして遠方の知を手に行ける状況を出現させた。他方、私たちはインターネットの普及によって、出版の時代とは比べものにならないくらい容易に、グローバルな広がりをもって新しい知識にアクセスできる。出版の時代には、まだ大量の本や雑誌を所蔵する装置として図書館が必要で、大学は専門性の高い書物を集める図書館を、その不可欠の付属施設として発展させてきた。しかし今、すべての知識がデジタル化され、全文検索すらも可能になりつつあるなかで、冊子体としての書物とそこに書き込まれる知識は分離し、後者は文字通りユビキタス化しつつあるのである。この一六世紀的な地平とは異なる新たなメディアと知識の関係に、二一世紀の大学は果たしてうまく対応していくことができるだろうか。